

バルト海から洞爺湖へ：
= 2008 年を世界の貧困問題解決への歴史的転換点とするために =

2007 年 6 月 30 日
2008 年 G8 サミット NGO フォーラム
貧困・開発ユニット

1. 2007 年、バルト海に面したドイツの保養地ハイリゲンダムで開催された G8 サミットは、「成長と責任」という主題の下に、「世界経済」と「アフリカ」を論じました。近年重要な地球規模課題として認識されているアフリカの貧困と開発を主要な議題としたことで、その重要性をドイツ政府に対して訴えてきた市民社会に大きな期待を抱かせました。しかし、その期待は、サミットの終了とともに失望に変わりました。
2. 2000 年の国連ミレニアム総会では、貧困の克服に国際社会が総意を上げて取り組むことに合意しました。2005 年、スコットランドのグレンイーグルズで G8 諸国は、不十分ながらも、世界の貧困の解消に向けて、相当額の資金拠出をはじめとする政治的意思を示しました。しかし、その後 2 年間、貧困削減に向けた G8 諸国の資金拠出は、むしろ低下しています。
3. 今回のサミットで見られたのは、貧困問題の解決に関する G8 諸国の後ろ向きな態度でした。グレンイーグルズの約束は再確認されましたが、一部諸国はこれにもきわめて消極的な態度を示しました。世界で深刻さを増す HIV/AIDS、マラリア、結核の三大感染症対策と保健システムの強化に関して、G8 諸国は当面、合計 600 億ドルの資金拠出を約束しましたが、その内訳を詳しく見ると、国連機関などが算出した、各感染症における目標達成に必要なとされる金額の 3 分の 1 の額に過ぎず、またすでに決定済みであった金額を相当額含んでいるため、実際の新規資金額は年間 30 億ドルに留まると言われています。教育など必須社会サービスの側面についても、一般的な記述はなされていても、その履行を確実に担保する誓約はありません。進歩的な記述が一部見られる、マラリア対策や HIV の母子感染予防、女性・女子におけるエイズ問題への注目などについても同様です。
4. 一方、もう一つの主要議題となった「世界経済における成長と責任」の部分で、世界の貧困問題の解決に暗雲を投げかける動きもありました。投資ルールや知的財産権問題について、G8 を含む一部諸国でルールを決めて、それを途上国にも適用しようという動きです。一方、エイズ治療薬など必須医薬品の価格を下げるための、知的財産権に関わる国際的なルールの柔軟な運用については、一部の国の反対により、合意文書から削除されてしまいました。
5. このような結果に対し、アフリカの GCAP（貧困と闘うグローバル・キャンペーン）関係者は、「『成長と責任』というが、先進国の成長のためにアフリカに責任を負わせるということか」と憤っていました。私たちも同感です。G8 サミットでは、アフリカの貧困に対する歴史的責任も含め、G8 諸国が人権・人道の観点から自らの責任をどれだけ果たすのかが問われるべきですが、残念ながら、今回の「成果」の内訳は、本来の道筋はずれたものであると指摘せざるを得ません。
6. ハイリゲンダムでの失望は、そのまま、洞爺湖サミットへの期待へとつながります。逆に言えば、世界の貧困問題の解決に向けて、洞爺湖サミットはより大きな課題を背負うことになった、ということです。
7. 洞爺湖サミットに向けて、私たち自身がビジョンを作り出さなければならない、新しい課題も浮上してきています。今回のハイリゲンダム・サミットが近づくにつれて大きく焦点化された「気候変動」の課題は、貧困と開発の課題とも大きく関係することが明らかになっています。貧困な地域ほど気候変動に対する責任とは無関係である一方で、その影響を最も大きく受ける立場にある以上、気候変動問題への取り組みは、貧困問題の公平・公正な解決にとって不可欠な課題であるといえるでしょう。また、日本がアジア・太平洋地域に位置することを考えれば、一部諸国の経済成長の陰で忘れられている東南アジア・南アジア・太平洋島嶼国地域の貧困問題も焦点化される必要があります。さらに、これまで、G8 主導で作られるグローバルな経済ルールが、途上国の貧困や南北格差を固定化・加速化してきた経緯があり、市民社会による積極的なアドボカシーが必要となっています。
8. 世界の貧困問題の解決、ミレニアム開発目標の達成に向けた「折り返し点」となる 2008 年。私たち、日本の市民社会は、これまでの取り組みの遅れを洞爺湖サミットで取り返し、2008 年を世界の貧困問題解決に向けた転換点とするために、全力を尽くしていきたいと考えます。